

ピアノ教本『みんなのオルガン・ピアノの本』の 改訂に関する検討 (2)

—新・旧版 (第3, 4巻) の比較分析を通じて—

森本麻衣子
(本学非常勤講師)

深見友紀子
(児童学科教授)

はじめに

1957年に出版されたピアノ教本『みんなのオルガン・ピアノの本』は全4巻で構成されている。2015年, この教本は『新版 みんなのオルガン・ピアノの本』として改訂された。また, 教本に付随するワークブックも2017年3月に改訂されたため¹⁾, 教本全体が新版として完成したのものとなった。

前号では『みんなのオルガン・ピアノの本』と『新版 みんなのオルガン・ピアノの本』の全体的な比較をおこない, この教本の前半にあたる第1巻と第2巻について考察した²⁾。第1, 2巻は改訂に際して進度を一部変えていたが, 到達点は変更していなかった。また, 学習者が言語的, 聴覚的な情報から楽曲ごとのイメージを捉えることができる工夫も随所にみられた。

教本の後半にあたる第3巻, 第4巻では, 現代のレッスンに合わせた様々な調性, 拍子, リズムの楽曲が加えられている。また, バロックから近現代までの幅広い年代の楽曲を選曲したことも, 今回の改訂の大きなポイントであるという³⁾。

本稿では, 第3, 4巻について詳細に考察する。そして, 全巻を通して『新版 みんなのオルガン・ピアノの本』がどのようなピアノ学習を目指しているのか, 探ることにする。前号と同じく『みんなのオルガン・ピアノの本』を「旧版」, 『新版 みんなのオルガン・ピアノの本』を「新版」として比較, 分析していく。

1. 第3巻の新・旧比較

1. 1 掲載楽曲

旧版は69曲, 新版は48曲と, 掲載楽曲数は減少していた。新・旧共通曲は12曲と少なく, 大幅に曲を入れ替えていた。

旧版では目次番号がふられた楽曲(「かわいいピアニスト」のように曲名が付けられた楽曲)の練習が中心となっていた。そしてそれらの楽曲を弾く前の予備練習として, 「～のれんしゅう」といった楽曲が数曲ずつ配置されていた。

一方, 新版では「8分音符」や「ハ長調」といった13個の学習内容を目次に掲げ, 楽曲を配置するよう改訂されている。また, 調性の学習においては最初に必ず「スケールと和音」の練習を配置していることも特徴的である。

以上のことから, 旧版では目次番号がふられている楽曲を, 新版では「れんしゅう曲」とスケールと和音の練習以外の楽曲を「曲名付き楽曲」とし, それ以外の楽曲を「練習曲」と定義すると, 旧版の「曲名付き楽曲」は69曲中22曲(31.9%), 新版は48曲中30曲(62.5%)であった。新版では「曲名付き楽曲」の割合が約2倍に増えているため, 「曲名付き楽曲」を増やすことが今回の改訂の1つのポイントであったことが分かる。

1. 2 進度

第3巻は旧版と新版で掲載楽曲が大きく異なっているため, 新版の目次で具体的に示された学習内容を, 旧版ではどの楽曲で学んでいたのか比較する。比較検討する項目として, 新・

旧共に最初の学習内容である「8分音符の練習」、前半に配置されている「G-durの練習」、新・旧で配置が異なっている「F-durの練習」、共通曲が最も多い「指かえの練習」の4つを選んだ。

1. 2. 1 8分音符の練習

旧版、新版共に巻の出だしは8分音符の練習である。旧版は3曲の「練習曲」を学習した後に「かわいいピアニスト」に進む。一方、新版では「練習曲」は1曲で、その後に「狩」、「バグパイプ」を学習する。

譜例1は新・旧共通の「練習曲」である。新版ではこの楽譜を右手、左手、両手で弾くように指示されている。旧版ではこの後に両手で8分音符を弾く練習があり、それらを経て3曲目の「練習曲」では右手がメロディー、左手が伴奏の楽曲を配置していた（譜例2）。



譜例1 「れんしゅう曲1 / 8ぶん音ぶのれんしゅう」
(新版第3巻, p. 4 / 旧版第3巻, p. 4)



譜例2 「れんしゅう曲」(旧版第3巻, p. 4)

ここで、譜例2の「れんしゅう曲」と新版の「狩」(譜例3)を比較してみる。左手の伴奏形に注目してみると、「れんしゅう曲」ではアルベルティ・バスによる伴奏となっており、「狩」では2音による伴奏となっている。旧版では「かわいいピアニスト」でアルベルティ・バス

による伴奏が出てきているため、「れんしゅう曲」に盛り込んだと考えられる。

一方、新版では「狩」の次の曲である「バグパイプ」も2音、単音による伴奏となっているため、「狩」と同じく右手の8分音符の学習に重点が置かれていると読み取ることができる。アルベルティ・バスによる伴奏の方が技術的に難しく、今回の改訂の理由の1つに「3, 4巻の急激な進歩により、他の教本に移行する生徒がいる」ことが挙がっていたことを考えると、新版では第3巻の出だしの難易度を低くしたといえるだろう。



譜例3 「狩」(新版第3巻, p. 4)

1. 2. 2 G-durの練習

G-durの練習は新版において13個の学習内容のうち3つ目に位置付けられ、旧版でも巻の前半に楽曲が掲載されていた。

旧版では3曲の「練習曲」の後に「おしゃべりおうむ」(譜例4)が弾けるようになることを目標としていた。一方、新版ではト長調のスケールと和音の練習から始まり、2曲の「練習曲」を学習した後「のんきなジャック」「かじや」「ノルウェーのおどり」の学習へと入る(譜例5)。

新・旧それぞれの「曲名付き楽曲」で比較してみると、旧版の「おしゃべりおうむ」は右手のポジションの変化や指ひろげなどがあり、技術的に容易ではない。新版の3曲もすべてが五指内というわけではないが、ほとんどは右手のポジションを動かすことなく弾くことができる。そのため、左手の練習や両手の練習に多くの時

間をあてることができるだろう。さらには1曲の小節数に関しても、旧版の楽曲は16小節であるのに対し、新版は8小節や12小節と短いため、1曲を仕上げる時間は新版の方が短く済むだろう。1つの学習内容に対する楽曲数は新版の方が多くなっているが、難易度は新版の方が低くなっているといえる。

譜例4 「おしゃべりおうむ」(旧版第3巻, p. 9)

譜例5

上:「のきなジャック」(新版第3巻, p. 11)

中:「かじや」(同上, p. 12)

下:「ノルウェーのおどり」(同上, p. 13)

1. 2. 3 F-durの練習

F-durの練習曲に関しては旧版と新版とで配置が異なっていたため、難易度にも違いがみられた。旧版では1. 2. 2のG-durの練習の後、付点音符や2重音、指かえの練習、a-mollの練習といった学習内容を経て、F-durの練習曲が配置されていた。一方、新版ではG-durのす

ぐ後にF-durの学習を持ってきている。新版ではC-dur, G-dur, F-durの学習内容が続けて配置されており、基本的な調性に関して集中して学ぶことができるようになっている。

このことを踏まえた上で、F-durの学習内容としての最終楽曲をそれぞれ比較してみる。旧版は「かわいいアウグスティン」、新版は「ドイツのおどり」である(譜例6)。

譜例6

上:「かわいいアウグスティン」(旧版第3巻, p. 21)

下:「ドイツのおどり」(新版第3巻, p. 16, 17)

「かわいいアウグスティン」は旧版ではF-durの楽曲であったが、新版では7つ目の学習内容である付点4分音符を学ぶ楽曲として掲載されている。この曲の1小節目で、学習者は左手の4分音符の伴奏に、右手の付点4分音符と8分音符のメロディーを合わせることに苦勞しがちである。また、3小節目の2拍目で右手と左手の音が重なっているため、つまずきやすい。このような点から、新版では「かわいいアウグスティン」を巻の前半であるF-durの練習には取り入れなかったと考えられる。

一方、新しく掲載された「ドイツのおどり」では指くぐりが登場しているが、これはF-durのスケールと同じ指づかいである。また、左手も単音による伴奏なので、学習者にとっては比較的容易に演奏できる楽曲となっている。

学習内容を明記したことで、より学習者にとって練習すべき楽曲を選びやすくなったと考

えると、目次において学習内容を示したことは大きな意味があるといえる。

1. 2. 4 指かえの練習

第3巻は新・旧の共通曲が少ない。新版における13個の学習内容のうち、旧版の楽曲を入れ替えずに掲載しているのはこの指かえの練習のみである。ただし、「練習曲」は左手の伴奏を一部変更しており、「曲名付き楽曲」はメロディーも伴奏も改訂がなされている。新版は旧版に比べるとより細部にまで配慮した編曲となっており、共通曲であっても、改訂の際に音の1つ1つを吟味したことがうかがえる。

また、配置が異なっていることに注目したい。旧版では目次で3曲目の「おしゃべりおうむ」、7曲目の「おもいで」の「練習曲」に指かえの練習が含まれていた。旧版の「曲名付き楽曲」は22曲あるので、指かえの練習は巻の前半に配置されていたことが分かる。一方、新版では13個の学習内容の中で9個目に出てきており、巻の後半に配置するよう改訂されている。

指かえの練習において、新・旧共通の「曲名付き楽曲」は「おもいで」である。右手のメロディーの指かえに加えて、左手にはアルベルティ・バスによる伴奏があるため、比較的難易度の高い楽曲である。旧版ではこの楽曲を学習する前に、アルベルティ・バスによる伴奏がある「練習曲」を7曲、「曲名付き楽曲」を1曲経験するようになっていた。新版では指かえの練習を後半に配置することによって調整をおこなったのだと考えられる。また配置を変えただけでなく、アルベルティ・バスによる伴奏を2つ前の学習内容である付点4分音符の「練習曲」にも取り入れているところや、1つ前の学習内容である左手のメロディーの楽曲、「ライオンの行進」において、指かえの練習がおこなえる部分をつくっているところにも工夫がみられる。

1. 3 到達点

まず、それぞれの巻の最終楽曲で到達点を比較してみる。旧版は「ラ・クカラチャ」、新版

は「むかしの歌」である（譜例7）。



譜例7 上:「ラ・クカラチャ」(旧版第3巻, p. 42, 43)
下:「むかしの歌」(新版第3巻, p. 45)

小節数やリズムの複雑さなど、技術的な面から比較してみると、難易度は「ラ・クカラチャ」の方が高いといえる。第2巻と同じく、第3巻で学んだ内容を総合的に復習できる楽曲になっているためであろう。それと比べ、新版は学習内容ごとに楽曲を配置しているため、最終楽曲が巻のまとめの曲とはなっていない。ただし、「むかしの歌」は元々旧版の第4巻に掲載されていた楽曲である。第4巻で取り組んでいたg-mollの学習が、新版では第3巻の最終楽曲でおこなわれていることをみると、巻全体の難易度が下がっているともいえる。

このことは、巻の最終楽曲以外を比較してみても明らかである。例えば、d-mollの学習の「曲名付き楽曲」を比較してみると、旧版は「かわいいミュゼット」、新版は「メヌエット」である（譜例8）。

旧版ではd-mollの楽曲であった「かわいいミュゼット」は、新版では8分の6拍子の学習曲として配置されており、巻の前半で経験する。新版においてd-mollの学習はg-mollの1つ前の学習内容として位置付けられているため、次の第4巻も見据えた上で、d-mollの楽曲である



譜例 8 上:「かわいいミュゼット」(旧版第3巻, p. 27)

下:「メヌエット」(新版第3巻, p. 42)

「メヌエット」のような、ポリフォニーの楽曲を配置しているとも考えられる。ポリフォニーの楽曲は旧版では掲載されていなかったことも踏まえると、新版では旧版とは異なる演奏技術が求められているといえる。

新版の到達点は旧版とは異なっているが、それは学習する音楽の年代の幅や調性の種類が増えたことによるものである。楽曲の種類は増えたが、学習者がスムーズに練習できるように新版では選曲、編曲、楽曲の配置の面でより工夫がみられた。よって、巻全体の難易度に大きな変化はないと結論付けてよいだろう。

2. 第4巻の新・旧比較

2. 1 掲載楽曲

旧版は54曲、新版は44曲であり、全4巻の中では第3巻について減少率が高い。共通曲は16曲である。

「曲名付き楽曲」でそれぞれ比較してみると、旧版は54曲中27曲(50%)、新版は44曲中29曲(65.9%)であった。第3巻と同様、新版では「練習曲」が減り、「曲名付き楽曲」が増えている。

2. 2 進度

先述したように、元々旧版の第4巻で学習していたg-mollは、新版第3巻の最後の学習内容となっている。

巻の出だしは異なっているが、第4巻の学習内容は新・旧共通しているものが多い。しかし、学習内容は同じでも楽曲が変更されているため、難易度には変化がみられる。比較検討する項目は、新版で最初の学習内容として位置付けられている「スタッカートの練習」、新・旧共に巻の前半に配置されている「16分音符の練習」、新版において最も楽曲数の多い「付点8分音符の練習」、改訂の意図が反映されている「装飾音符」の4つを選んだ。

2. 2. 1 スタッカートの練習

スタッカートの練習には「曲名付き楽曲」だけが配置されている(「曲名付き楽曲」は「ロシアのおどり」と「マラゲーニャ」(譜例9))。

「ロシアのおどり」は旧版の第3巻に、「マラゲーニャ」は旧版の第4巻に掲載されていた。どちらも元々スタッカートの練習曲として掲載されていたものを、新版ではまとめて第4巻に配置している。

2. 2. 2 16分音符の練習

「曲名付き楽曲」で比較してみると、旧版は「野いちご」、新版は「くまのおどり」「おばけやしき」である(譜例10)。

「野いちご」はe-mollの楽曲であり、e-mollの楽曲は全巻を通して初出であった。つまり、「野いちご」には16分音符及びe-mollの2つの学習内容が含まれていたことになる。また、旧版においては目次でe-mollの掲載がなかったことから、e-mollは定着を目指す学習項目というより、経験する学習項目として位置付けられていたのではないかと推察できる。一方、新版で「野いちご」はe-mollの学習内容の楽曲として、16分音符の練習の次に掲載されている。

旧版では、学習者は16分音符に加えて新しい調性を学習することになるため、難易度の高い楽曲だと捉えてしまうことも多かったのではな

譜例9 上「ロシアのおどり」(新版第4巻, p.4)
下「マラゲーニャ」(同上, p.5)

譜例10 上:「野いちご」(旧版第4巻, p.17)
中:「くまのおどり」(新版第4巻, p.11)
下:「おばけやしき」(同上, p.12)

いだろうか。新版では16分音符の練習の楽曲を新しくすることで難易度を下げ、より16分音符の練習に専念できるようにしているのではないかと読み取れる。そして、「野いちご」には新しく e-moll の学習項目を立て、16分音符の練習をおこなった後で e-moll の学習に集中できるよう配慮したのだと考えられる。

もちろん、「くまのおどり」でも16分音符の

練習に加えてオッターヴァ (八度) が初出であるため、学習内容が2つあることになる。しかし、左手の伴奏は同音でリズムも一定のものであり、右手のメロディーのリズムにも規則性があることから、難易度を押さえている。

2. 2. 3 付点8分音符の練習

新版において最も楽曲数が多く、他の学習内容では掲載楽曲が2~4曲であるのに対し、付点8分音符では6曲ある。

「アヴィニヨンの橋の上で」は新・旧共通曲であり、学習者には聞き馴染みのある楽曲であろう。そのため、比較的取り組みやすい楽曲だといえる。新版で新たに追加されたのが「マズルカ」と「メヌエット」である(譜例11)。

譜例11 上:「マズルカ」(新版第4巻, p.23)
下:「メヌエット」(同下, p.25)

「マズルカ」は「アヴィニヨンの橋の上で」で学んだことの定着を目指したものであると考えられるが、「メヌエット」は付点8分音符と共に、既に学習済みの項目である3連符も登場し、よりリズムが複雑になっている印象を受ける。♩と♩³が1つの曲で出てくる場合、♩を♩³と無意識に演奏してしまって正確なリズム把握が難しくなることが少なくない。その意味

でも、「メヌエット」を加えたことには意義がある。

様々な音価の音符を含んだ楽曲に取り組むことはより読譜みの学習を深め、定着を目指すことにつながる。読譜において、リズムの読み取りに苦勞する学習者が多いことも考えると、ここで音価の異なる音符で構成されている楽曲を練習することは重要であろう。

2. 2. 4 装飾音符の練習

新・旧共に巻の後半に配置されている学習内容である。「チャイニーズセレナーデ」が新・旧の共通曲であるが、新版では「まねっこハムスター」と「めんどりのひとりごと」が加えられている(譜例12)。

The image shows a musical score for two pieces. The top part is for 'まねっこハムスター' (Manekko Hamster), featuring a melody with various note values and ornaments. The bottom part is for 'めんどりのひとりごと' (Mendori no Hitori goto), which includes a piano accompaniment with a 'Allegretto malinconico' tempo marking and a 'mf' dynamic. The score is written in 2/4 time and includes various musical notations such as slurs, accents, and ornaments.

譜例12 上:「まねっこハムスター」(新版第4巻, p. 30)

下:「めんどりのひとりごと」(同上, p. 32)

「まねっこハムスター」は指導者との連弾曲になっており、学習者は一段譜を左右の手を交互に用いて演奏し、一般的な両手奏はおこなわない。よって楽曲の難易度は低くなり、装飾音符を集中して学ぶことができる。旧版でも右手奏のみの「練習曲」から学習が始まっていたが、「まねっこハムスター」の方がより装飾音符を

学習する意図が強い楽曲となっている。また、「まねっこハムスター」は装飾音符を伴った8分音符と16分音符だけで構成された楽曲であるため、装飾音符の学習に加えて、巻の前半に学習した16分音符の復習曲にもなっていることが特徴的である。

「めんどりのひとりごと」も、装飾音符の学習に加えて付点8分音符が復習できる楽曲になっている。付点8分音符の練習は装飾音符の練習の3つ前の学習項目であり、学習の定着を確認できる楽曲となっている。

このように、前に出てきた学習項目を復習できる楽曲を新たに選曲したことも、新版の大きな特徴であろう。学習する内容自体は変えていないが、前後のつながりも考えた上で楽曲を配置することによって、より学習の定着を目指すことにつながっていると読み取れる。

2. 3 到達点

旧版では巻の後半においてアメリカの民謡や日本人の曲などが掲載されていた。これらは一時代以上前のポピュラー曲であるためか、現代の学習者には馴染みのない楽曲であるためか、今回の改訂ではそれらの楽曲が全て削除されており、楽曲が大きく入れ替わった。

第3巻と同様、第4巻においても学習する音楽の年代の幅や調性が増えているため、到達点には改訂がみられる。まず「新たに加えられた調性」について分析する。また、第4巻では楽曲の拍子においても新・旧で違いがみられたため、「拍子の種類と割合」にも注目していくことにする。

2. 3. 1 新たに加えられた調性

新たに加えられた調性はB-dur, A-dur, Es-durの3つである。このうち目次に学習内容として掲載されているものはB-durのみであり、A-durとEs-durのスケールと和音、楽曲は「チャレンジ!」の中に含まれている。

B-durの学習はスケールと和音から始まり、「練習曲」と「曲名付き楽曲」をそれぞれ1曲ずつ学ぶようになっている。B-durのスケール

はこれまで学んできた調性のスケールとは指づかいが異なるため、時間をかけて練習する必要がある。「曲名付き楽曲」の「夕べの祈り」は、左右の手いづれもほぼ5指内で演奏できるようになっており、新しい調性の学習に集中できるよう、技術的な難易度を下げている。

A-dur と Es-dur は、目次の中で学習内容としては掲載されていないが、それぞれの「曲名付き楽曲」がこの巻の最終楽曲として位置付けられている。しかし、これまでのように「練習曲」を数曲配置してから「曲名付き楽曲」に進むわけではない。よって、これらの調性は定着を目指すというよりも、経験するという意図が強いものだと考えられる。

しかしながら、調号が♯3つ、♭3つの楽曲は演奏の技術的な面でも、譜読みの面でも難易度が高い。また、「舟歌」のように56小節と比較的長く、弾きごたえのある楽曲も「チャレンジ!」には盛り込まれている。次の教本に進むことも見越して、巻の後半の難易度は上がっていると考えられる。

2. 3. 2 拍子の種類と割合

前号でおこなった全巻を通した拍子の分析によると、大きな変化がみられたのは第4巻であった⁴⁾。旧版では4分の4拍子の楽曲が約半数を占めていたのだが、新版では4分の3拍子及び4分の2拍子の楽曲数が4分の4拍子の楽曲数を上回った。

ここで、旧版における「曲名付き楽曲」の25曲（連弾を除いた楽曲数）の拍子の割合をみると、4分の4拍子は25曲中9曲（36%）、4分の3拍子は25曲中8曲（32%）、4分の2拍子は25曲中6曲（24%）、8分の6拍子が25曲中2曲（8%）であった。つまり、4分の4拍子の「曲名付き楽曲」は元々旧版においても、とびぬけて多いわけではなかったことになる。それでも全体の中で4分の4拍子の楽曲が約半分を占めていたのは、「練習曲」において4分の4拍子が多く用いられていたためであろう。実際、削除された「練習曲」は26曲あり、そのうち14曲が4分の4拍子であった。

編集部は4分の4拍子を少なくした理由として、「ロマン期以外の曲を増やしたかったことと同じく、早い時期から色々なタイプの曲を体験してもらいたかった」と述べており、巻の後半の曲をすべて入れ替えたことと連動するものであった。このことに加えて、「練習曲」において4分の4拍子の楽曲を多く削減したことも、拍子の割合の変化をもたらした要因となっていると考えられる。

3. 新版が目指すピアノ学習

3. 1 全4巻を通した改訂点

ここまで各巻の改訂のポイントについて、具体的な教材分析を通して考察をおこなってきた。第1巻、第2巻は共に到達点を変えていなかったが、第3巻と第4巻においては到達点を変更していた。また、第1～3巻に関しては難易度の大きな変化はみられなかったが、第4巻に関しては難易度が上がっている印象を持った。

第1巻、第2巻は旧版と共通している楽曲の曲順を入れ替え、学習内容に沿った楽曲を新たに入れ込むことによって、より学習者がスムーズに次の楽曲に進めるように調整を図っていた。一方、第3巻、第4巻では大幅に楽曲を入れ替え、学習内容を目次に記載した上で「練習曲」と「曲名付き楽曲」を配置したことで楽曲が厳選され、進度の明確化を実現した。

特に第3巻、第4巻では学習する調性の種類が増えたこと、幅広い年代の楽曲から選曲したことなど、旧版に比べて学習する内容は増えていた。しかし、難易度の急激な上昇を抑えるために学習内容を精査し、項目ごとに楽曲をまとめたことによって、進度をなだらかに調整することができていた。また、「練習曲」を必要最低限の曲数におさめつつも、学習の定着を図る工夫がなされていた。「曲名付き楽曲」を練習していくことで前の学習内容も復習できるような選曲、編曲をおこなったところも、「3、4巻の急激な進歩」を是正するための大きな工夫であったと考えられる。

また、巻全体として幅広い年代の楽曲を配置しており、この後に続くピアノ学習を見越した

内容となっていることも意義深い。ポリフォニーの楽曲や近現代の楽曲が増えたことで技術的な側面はもちろんのこと、楽曲の中で音楽的な歴史や知識をより深く学ぶことができるようになっていくと捉えられるだろう。

3. 2 指導において留意すべきこと

学習者が表現豊かに演奏できるよう、伴奏譜や言語表記に工夫がみられた第1巻、第2巻を経て、第3巻へと続いていくことを考えると、第2巻までにじっくり音楽表現について感じ、考える学習をおこなうことが重要になるだろう。第2巻までに多くみられた伴奏付きの楽曲では、指導者の伴奏によって楽曲のイメージをより深く感じ、それを学習者自身の表現へと活かしていくことが大切である。速度記号や強弱記号の学習においても、この教本には曲想に合わせた表現方法を考えることができる工夫が随所にみられた。

第3巻以降は演奏技術の向上、音楽的知識の定着をより重視した内容となっている。ピアノ学習の導入期において、ピアノを弾くことを単なる指の運動として捉えるのではなく、「ピアノを通して音楽を表現する」という意識を持つことは重要なことであり、第2巻までの学習の仕方によって、第3巻以降の音楽表現はより豊かなものになっていくだろう。「学習者が導入期の段階から曲のイメージを持って演奏できるように」という、旧版から変わらずにある教本のコンセプトを指導者はしっかりと汲み取り、

伴奏の仕方や声かけ、楽曲の分析など、教材研究を丁寧におこなうことが求められる。

4. おわりに

以上、ピアノ教本『みんなのオルガン・ピアノの本』全4巻の改訂について検討したが、今回は『新版 みんなのオルガン・ピアノの本ワークブック』については触れることができなかった。今後も研究を続けたい。

謝辞

本稿の執筆においても『みんなのオルガン・ピアノの本』の発売元である、株式会社ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングスには資料を提供して頂いた。厚くお礼を申し上げます。

注

- 1) ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス編『新版 みんなのオルガン・ピアノの本ワークブック』1～4（ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス, 2017）
- 2) 森本麻衣子, 深見友紀子『ピアノ教本「みんなのオルガン・ピアノの本」の改訂に関する検討—新・旧版（第1, 2巻）の比較分析を通じて—』『京都女子大学発達教育学部紀要』（京都女子大学, 2017）pp. 53～62
- 3) 高橋正夫『新版 みんなのオルガン・ピアノの本4』（ヤマハミュージックメディア, 2015）p. 1
- 4) 森本麻衣子, 深見友紀子 前掲論文 p. 55

